内部進学者登校の折、日頃なじみし娘、常とは異なる髪形したる様をかしければ、詠みてつかはしける。

束ね髪　結び目ずらし前に垂る　十五の君の春爛（ゆ）かむとす

夏

題知らず

夏服の少女の歩み陽に映えてまぶしくなりぬ初夏の街並み

担当授業終へて大学にまゐらむとするに、通院早退とて共にまからむとあれば、詠みてつかはしける。

傘を置きてともに歩まん昼の街　続くともなき梅雨のはれまに

亜衣璃

太陽（ひかり）さし目がさめ上向くひまわりと　海風とともにあなたのもとへ

かへし

青春の光の中に憧れる君の若さの夢ぞ羨（とも）しき

あとがき

王朝期の歌合わせの評語に「歌めく」というものがあります。いかにも歌にふさわしい表現を成し遂げていたり、風情をただよわせていたりすることをいう言葉のようです。本歌集の「歌めき」というのはこの「歌めく」という言葉に由来しますが、その意味は本来のものとは異なります。そんな用法が王朝期にあったかどうかわかりませんが、私は「歌めく」の「めく」を「春めく」の「めく」のように、「〜の兆しを醸し出す」というような意味とみなし、ここでは、「歌めき」を「歌を詠みたくなる気分」のような意味として使うことにしました。これは誤用の一種と言えるかもしれませんが、あえてこの言葉にそのような意味を負わせて題名に使うのは、今自分が歌を詠もうとしている気分を表わす語を求めるとき、王朝期の歌語「歌めく」に関わりをもつ「歌めき」以外に適切な言葉を見出せないからです。

おおよそ近代短歌の主流を占めるのは独詠歌といえるでしょう。私が歌らしきものを詠み始めたのは高校時代に遡りますが、当初詠んでいたのはやはり独詠歌でした。ところが、授業で接した王朝期の物語のいくつかに影響を受けたのか、私の創作の興味はたちまち贈答歌に移ります。

というか、好きになった同学年の女の子に歌を贈るということを始めたのです。幸い、相手の子はこちらの奇妙な趣味に付き合ってくれて、はじめての歌の贈答はまんまと成功しました。その際の贈答歌は稚拙さが勝るものであるため本歌集には載せていませんが、この女性には、この歌集成立の嚆矢をなした方としてまず感謝の言葉を捧げるべきでしょう。

それ以来、私の詠歌の中心は贈答歌となりました。というか、高校卒業以降、異性を好きになるごとに、相手に歌を贈ることをし始めたわけです。ただし「答歌」＝返歌を貰うことはほとんどありませんでした。これは相手にとってこちらが魅力不足であり、歌も力不足だったということもあったかもしれませんが、それ以上に、相手がそんな風習には不慣れなことと、返歌の出来によって自分を値踏みされることを避けたからだと、今は考えています。そのことについては、数すくない返歌の相手は、専ら体裁意識がまだ強いとはいえない年齢の子だったということをその証左としてあげられるかもしれません。

そうした状況にもめげず私は贈答歌のかたわれを詠み続けました。もっとも年齢がかさむにつれて贈答歌は恋歌の代名詞ではなく、親しい相手へのあいさつ代わりの要素も加味してゆくわけ

ですが、それはいつしか、独身生活を続けたゆえの子孫の欠如を補うものとして世に残したいものとなりました。しかしながら、如何せん歌の性質上多くを詠めるものではなく、特に長年勤しんでそれなりの歌を詠む機会を得ていた学校を退職して以後は、詠作の機会も乏しいものになる一方、詠み貯めた歌で人の鑑賞に堪えるものの数はとても歌集などをまとめられるものではなく、それを世に問う思いは叶えられることなく終わるものと思っていました。

そうした風向きが俄かに変わったのは、産休代用教員として昨年の六月から期限付きで今の女子校に勤めはじめてからです。八年近い空白期にも教える技は残っていたようで、その面で生徒に不安を与えるというようなことはなかったようですが、それ以上に好意的に迎えてもらえたのか、学園ドラマを彩る小さなエピソードを髣髴させてくれるような出来事が次々と起こったのです。その具体的な状況は本歌集のとりわけ「相聞」の部の後半の歌群の詞書きから推測していただけるかと思いますが、長らく近所のスーパーのバイトのお嬢さんや市民図書館での常連のお嬢さんとの間にわずかに作れていた「歌めく」時間が、大袈裟に言えば奔流のように押し寄せることになり、歌めく機会を作ってくれた生徒へのお礼の気持ちをかねた贈歌がその結晶として続々

と生まれることになったのです。

私はかつて王朝期の物語の中の、会話のような速やかな歌の贈答を、自らの経験に鑑みて訝しく思うばかりでしたが、この時ばかりは、自分ながらいい調べと思われる歌が機会に応じて湯水が湧くように詠出される経験をし、それは実際にあったことなのだと実感するようになりました。そうした状況は今も継続しているようにみえますが、とりあえず、今の職場を辞するに際し、枯れ木に花を咲かせてくれるような「歌めきの時」をもたらしてくれた皆さんに謝意を表すべく、歌集をまとめることにしたのです。

本歌集には、こちらから生徒に詠みかけた歌とは別に、生徒の作に私が答える形の贈答歌群が含まれていますが、当初後者は今とは別な形でまとめられる予定でした。冬休みの任意課題として、短歌を読むことを提案したところ、先生が返歌してくれるなら応じてもいいということになり、さらに賀状として寄せられたものにはこちらも賀状の形で返歌をするという条件が加わって、それは実施の運びとなりました。私としては、こうしてできるはずの生徒との贈答歌集を、懇意の国語係の生徒の手助けを得て印刷製本し、それを当初予定されていた三月末の退職時の手土産

にして学校を去る予定だったのです。

三学期になって文系の三年生の授業がなくなって以来、私が受け持っていたのは二年生の理系娘（2クラスにまたがるものながら、合計わずかに四十六名）のみであり、贈答歌の課題もこの娘達に課したものでした。実際のところ、昨夏以来始まった歌めく時空の創出は、受験で心の余裕がなかった三年生ではなく、ほぼ、定期試験時以外はあまり勉学に熱心とは言えないこの娘達およびその仲間の一部の文系娘のみによってのみなされたものでした。

この娘達は私の口車に乗せられて、詠歌の企てを受け入れたものの、いざ蓋を開けてみると、志向的に詠歌などに縁がない子が多かったせいか、冬休みが明けても提出されたのは該当者の半分に満たない数でしかありませんでした。おかげで私は易々と返歌を届けることができたわけですが、こんな状況では、取り立てでもしない限りとても全員の歌の掲載はおぼつかないだろうということになり、それをまとめて退職の記念の置き土産にするという企ての実現は困難だということになってしまいました。

思案に暮れた中、考え付いたのが、今まで詠み貯めたものを歌集として出版し、そこに生徒と

の贈答歌を入れるということでした。そう考えたわけは、生徒への返歌も加えれば歌集として編むのに十分な歌数を確保することができるということと、歌を提出してくれた生徒と「歌めきの時」を作ってくれた生徒は重なる子も多いので、自分の歌集に生徒の歌も載せてあげれば、生徒への謝意をさらに示すこともできるからと言うことです。また、なぜか私の勤務期限が九月まで延びて、なお一層の歌めく時空の創出機会が増え、詠歌の数が増えることも予想されました。そこで、私はこうした目論見を、前著でお世話になった武蔵野書院の前田智彦氏に詠歌の幾つかとともに披歴し、ご相談したのですが、幸い快い賛同の言葉を得ることができ、かくして、新たに受け持つことになった生徒との歌も加え、このような形の歌集が世に出る運びとなったわけです。

本歌集に載るような歌は、その成立事情と不可分のものであり、当然詠歌成立のいきさつを説く詞書きが不可欠なわけですが、私はそれを古語で記すことにしました。その理由は、既に述べたように、私の歌が王朝物語的発想に由来していることと、それ以上に「歌めく」時空の叙述に充てられるのは日頃使われる言葉ではなく、それを超えた言葉であるべきだという考えからです。それにより、若年時の歌にまつわる出来事はともかく、昨今の学校生活での、定年過ぎの教員と

女子高生との何気ない日常の一コマの、詩的な時空への昇華を可能ならしめることができたのではないかと密かに自負しています。

それはともかくとして、この歌集出版の目的の一つは現在の勤め先の生徒への感謝ですから、本歌集の装幀と題簽は勤め先のイメージを髣髴させるものとなることがふさわしいわけです。そこで、歌集の装幀と題簽は、アートデザイン科に在籍しかつ書道部でも達筆で知られる生徒、仲ひな乃さんにお願いすることにしました。また私の苦手とする校正に関しては、私の歌に最初に興味を示してくれた理系クラスの野村彩花さんと石田亜衣璃さんにお願いすることにしました。この三人については勿論かかわりのある歌が本歌集に収められています。

思えば本歌集の実現は一種の仏恩の結果ともいえるものです。仏教書の原稿を抱えながら出版の目途を立てられずにいた私と武蔵野書院との縁を、異分野への転出にも目をつぶり取り持って下さったのは、大学と院の指導教授であった中野幸一先生でしたが、院生時代そのご指導のもと、私が研究に勤しんでいたのは仏教的理念が重要な要素となっている『うつほ物語』でした。私の仏教への興味はそこに由来するわけですが、いまそこに淵源する仏教書を出していただいた御縁

で本歌集の出版が可能になったわけです。

またその完成に「歌めきの時」を創出してくれた生徒との出会いが大きく寄与していることは述べた通りですが、その出会いは現代的な校舎ながら、その一角に鐘楼をもち、校舎のところどころに仏像仏画が安置される学校でなされたものでした。実際のところ、仏教書を出したことと、本校に勤めたことに表面的には何の因果もありませんが、数珠を携行し、いわばお線香色のブレザーを纏い、時々に念仏を唱える愛すべき生徒を思う時、本歌集の出版が実現できたことについてはやはり仏恩を感じざるを得ないわけです。

今願うことは、この歌めきによってもたらされた歌が私の単なる自己満足と生徒達との思い出に終わらず、多くの人の人生の一コマと親和性を結び、詩的時間を共有し得るものとなることです。最後に、既にふれたように本歌集の実現に際しては武蔵野書院の前田智彦氏のご配慮とご厚情をいただきました。心から感謝いたし、結びの言葉といたします。

令和三年八月七日

三　上　　満

《編著者紹介》

三上　満（みかみ　みつる）

東京都生まれ。
早稲田大学教育学部国語国文学科卒業。
同大学大学院文学研究科博士課程満期退学（平安文学専攻）。
1981年～2012年、2020年6月～2021年9月都内および千葉県内の私立中学高等学校に国語科教員として在職。現在千葉県八千代市在住。
著書に『原典でたどる仏教哲学入門 I　釈迦の教え』（武蔵野書院、2017年3月）がある。

歌めき　三上満贈答歌集

2021年9月9日 初版第1刷発行

編 著 者：三上　満
発 行 者：前田智彦
校正参画：野村彩花・石田亜衣璃
装画及び題簽：仲 ひな乃
装　　幀：仲 ひな乃＆武蔵野書院装幀室

発 行 所：武蔵野書院
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町 3-11
電話 03-3291-4859　FAX 03-3291-4839

印刷製本：三美印刷㈱

© 2021 Mitsuru MIKAMI

定価はカバーに表示してあります。
各歌の著作権は作者それぞれにあります。
落丁・乱丁はお取り替えいたしますので発行所までご連絡ください。
本書の一部または全部について、いかなる方法において無断で複写、複製することを禁じます。

ISBN 978-4-8386-0496-8 Printed in Japan